

---

**チートだけど宿屋はじめました。**

nyonnyon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートだけど宿屋はじめました。

### 【Nコード】

N1661BA

### 【作者名】

nyonnnyon

### 【あらすじ】

若くして寿命で死んだ男がチートをもらって異世界へ!?

でも無双をする気はありません。ほのぼの宿屋でもやっていこうと思っています。目指せ世界一の宿屋!!

という名の作者好物ごった煮小説です。まだまだ宿屋出てきません。初投稿です。拙い表現やグダグダな内容など至らない点も数多くあると思います。が、完結目指して頑張りますのでよろしくお願います。

作者は繊細なハートの持ち主です。厳しい指摘を受けますと粉々に砕け散りますのでよろしくお願いします。

この作品は、『主人公最強』『都合主義』などを含みます。

そういった内容が嫌いな方は回れ右して全速前進DA でお願います。

ある日突然に（前書き）

皆様始めまして。

作者です。

初投稿です。

お目汚しかもしれません。

それでもよければ

どうぞ。。。。。

## ある日突然に

「いらっしゃいませ、『竜帝の宿木』へ」

もつ何度この挨拶を交わしただろうか？

オークラン王国首都克蘭克蘭にひっそりとたたずむ宿屋

『竜帝の宿木』

その宿屋で

女主人『カーラ・グライス』は一人物思いに耽<sup>ふけ</sup>っていた。

- - -

『竜帝の宿木』には、多くの売りがある。

例えるなら【料金】

安い。とにかく安い。

例えるなら【料理】

美味しい。とにかく美味しい。

そして何より【カーラ・グライス】

美しい美貌、173cmの長身、無駄が一切ない肢体。

その全てが男性、女性、老いも若きも問わず魅了するのである。

そんなカーラだが実は誰にも言えない秘密がある。

それは・・・

『元男の異世界トリッパー』であるということ。

## 回想

はじめまして、俺の名前は高橋<sup>たかはし</sup>竜太<sup>りゅうた</sup>そこそこの大学を出て、  
そこそこの会社に就職した今年で28になるそこそこのおっさんだ。  
中には28なんてまだまだ若いというやつもいるかも知れないが、  
運動しなければすぐに腹が出てくると言えばどれだけおっさんか分  
かっていたただけるだろうか？

今日は会社が休みなので久しぶりにゆっくりできる・・・つてのに、

「見慣れた天井だ」

とても見慣れた自分の部屋の天井でしたw。

ただ・・・。

『申し訳ありませんでした!!!』

いきなり謝ってくるこの金髪は何者だろうか？

『申し訳ありませんでした!!!』

しかもザ・D O G E Z Aじゃないか。

『申し訳ありませんでした!』

まあいいとりあえず、

『申し訳あー!』うるさいッ!しかも徐々に『マーク』が減ってる  
「!」

ベキッ!

フベシッ!

って痛いじゃないですか!!!』

「なにか問題が?」ニコッ

『イエ、ベツニナニモ・・・』

ないのか・・・。まあいい。

「で、お前は誰なんだ《いきなり土下座娘》」

『そんな変な名前じゃありません!私は最高神です!』

サイコ・ウシン?ベルギーあたりの芸術家だろうか?

『違いますッ!!最高・神です!『最も高き神』です!!!!』

へえ〜。最高神ねえすごいすごい・・・。

って最高神んんんん!!!

『えっへん。最高神です。』

「で、その最高神が何の用かな？なんか謝ってたみたいだけど？」

『あれ！？すごい普通に切り返してきましたね！？』

おかしいなあ〜もう少し最高神ネタで引っ張れると思ったのに  
ブツブツ・・・』

まあ、小説とかにはよくあるパターンだし・・・。

「てか何の用だよ、最高神（嗤）さん？」

『なんか微妙に字が違う気がします・・・』

コホンツ！説明しましょう！

高橋竜太さん！貴方は死にました！！』

は？

『貴方はお亡くなりになりました！！』

は？

『貴方は身罷みまかりました！！』

おk落ち着け難しい日本語を使うな。

大体把握したぞ、ドツキリだな。

『違います貴方は本当に亡くなったんです！！』



「まじで！？何で！？まだ若いぞ俺！？」

「あっアレか！テンプレか！『私の手違いで殺してしまいました』」

「お詫びにチート転生です」ってヤツか！！！！

「ヒャッホーイ！！ウホホーイ！チートだぜーチーと」それも違います！！！！」

「違うの？でも謝ってたじゃん？」

「私の手違いで殺したわけじゃありません。ただの寿命です。じゅ・みよ・う！！！！」

「寿命？俺寿命で死んだの？まだ28なのに？」

「てか寿命で死んだんなら何で謝ってたんだ？」

「えーとりあえず説明しますね、」

「貴方は28歳になった2カ月後、自宅睡眠中になぜか亡くなる、それは神様手帳にも書いてありますので間違いありません。」

「ちょっとまで、何だ”なぜか亡くなる”ってのは！？」

「気にしちゃいけませんよお、ぶっちゃんけ設定考えるの面倒だったんです。」

「28年前の私が・・・」

『それはそれとして私が謝っていた理由は、貴方が入るはずだった輪廻の輪に

別の人を入れてしまったんです。

そのせいで空きスペースがなくなり貴方に入る余地がなくなってしまった。

なので貴方は輪廻の輪に入れずあぶれてしまった。

ということですよ。テヘツ』

『テヘツ』 『じゃ・・・ね〜じゃるがい!!!』

訳が分からん！そもそもなんで別のヤツを入れとんじゃい！

『まあ理由は【ご都合主義】でことで置いておいて、貴方には選択肢が三つあります。』

- 1 ・ 輪廻の輪の空きを待つ。
- 2 ・ 浮遊霊として彷徨う。
- 3 ・ 異世界へGO!!!

私としましては異世界行きをお勧めします。

揉み消しが簡単ですので・・・ボソツ』

「今なんかボソツと言わなかったかい？」

『イエイエナニモイツテオリマセンガ』

『で、どれにするんですか？』

怪しい、怪しすぎる!!!

『3.ならチートもOKですよ?』

なに!?チートOKですと!?明らかに怪しいがチートは魅力だ。

何を隠そう『俺』こと『高橋竜太』はオタクである。

それも隠れオタクだ。

オープンには出来ないが隠れてネット小説なんかを読みまくっている。

特に日本最大の投稿ネット小説サイト『小説を読むゼヨ!』は素晴らしい!!

色々な人が自分の空想、妄想などをまとめて詰め込む投稿小説がいっぱいなのだ!

そこで様々なチート、主人公最強ものを読んで(自分ならこうするのにな...)

などと妄想に浸ることもしばしばあったほどだ。

そんな俺が憧れのチート主人公に!?おいしい、おいしすぎる!

おいしすぎて逆に怪しいが...

『どれにしますか?』

「決まってるだろ...だ!!」

こうして俺『高橋竜太』の異世界行きは着々と進行していくのであった。

## ある日突然に（後書き）

どうでしたでしょうか。

誤字・脱字は極力修正させていただきます。

月10更新程度を目指したいと思います。

よろしく願います。

感想お待ちしております。

1 / 4 転生者 異世界トリッパーに変更しました。

そして異世界へ・・・ (前書き)

今のところの話です。

……

そして異世界へ……。

やあ、さっき振りだね 最高神（笑）に言われてとりあえず

『3・異世界へGO!!!』を選んだ

たかはしりゅうた  
高橋竜太だよ。このブタ野郎。

懐かしのネタ……スマソ

とりあえずは回想の続きご覧下さい。

— —

『ところで、チートはどうしますか？今なら大チャンス！！  
大抵の願いならかなえますよ？』

チートかどうしよう・・・。

ああこの括弧つけた喋り方の金髪美女が最高神らしい。

『なんでもいいんですよ。体力無限でも魔力無限でも不老不死でも  
何ならアニメや漫画、ゲームの技でもいいですよ。』

例えば

金色王様野郎の『たぶんゲート・オブ・バビロンどこでも宝具庫』でも

括弧付け少年の『これは大嘘憑きか？そんなことはなかった』でも

ドラゴン求めてシリーズの『死んでも王様の前また王様の顔か』でも

まったく最後じゃない物語シリーズの『戦闘終了後のアレ勝利のファンファーレ』  
でも

なんでもOKですよぉ〜』

最後の二つはチートか？てか、勝利のファンファーレはただ  
のBGMだろ！？

『シリーズとうしてあんなに変わらないBGMはもはやチートとい  
つていいと思います』

。。。  
まあ確かにほとんど変化がない素晴らしいBGMではあるが・

「それはそうとして、俺が行く世界はどんな世界なんだ？」

やっぱりそこは気になるだろ。

『 えゝ剣と魔法の世界ですね。亜人やドラゴンなんかいる世界です』

なるほど・・・ってことは、

「戦争とかもあるってことか？」

やっぱりそこは気になるだろ。 っつて、この反応2回目

！！

『 そんなことはありません。基本平和です。時々魔物が村を襲うぐらいで』

『 それで大体どんな能力がいいかは考えましたか？』

まあ平和だってんなら。

「女になってみたい」

やっぱこれだろ。

『 ……は？』

「女になってみたい」

『 いやいやいやいや・・・ちょっと待ってください！？ えっいきなりですよね！？』

さっきまで「チート、ヒヤホーイ」とか言ってませんでしたっけ？

それがいきなり女になってみたい！？話が飛躍しすぎです！！！！

『 ……』



まあ確かにそう思うかも知れないが・・・

「あんた最高神だろ？俺のこととかも全て知ってんだろ？  
なら知ってるだろ、俺がバーチャル世界では女主人公を使っ  
てる」

そう俺は所謂『ネカマ』ってヤツだ。

最近では最低の詐欺師みたいな不当な扱いを受けたりするが  
・・・

だが俺は誰にも咎められるつもりはない！！

現実世界で体験できないことをするのがバーチャル世界！！

不細工だってイケメンになれる！！

年寄りだって若くなれる！！

ならば男だって女になれる！！

それがバーチャル世界！！

だから俺はバーチャル世界では女になっている！！！！

「だから俺は投稿小説を読みながら・・・。

自分が異世界にいけたら女になりたいと常々思っていたん  
だ！！！！」

これはマジだった。

男の子が憧れる夢TOP10にはあるんじゃないだろうか？

心のどこかでは女になってみたいと思っっているんじゃないだろう

か？

それを叶えたいと思うのは不適切なことだろうか？

しかも幸いなことに俺は『年齢≠彼女いない歴』ではない。

それなりに体験も済ませた。ある意味男として悔いのない人生を歩んだと思う。

だからこそ第二の人生は女として生きてみたい。

こう思うのは間違っていないと思う。

『そうですか、そこまで熱い松岡 造並みの熱意を見せられたら仕方ありません。』

貴方を女として異世界に送ります。ただ……。

今回は転生ではなくトリップなので肉体を作りかえることになりますよ？

激痛はげしい進すすみますよ？

肉体と精神のギャップで悩むかも知れませんよ？

それでもいいですか？』

最高神が心配そうに聞いてきた。

その表情から『以前にも同じことをしたやつが俳人（誤字にあらざ）になりましたよ？』

という無言のプレッシャーを受け取ったが……。

「もちろんOKだ！ ” 肉体と精神のギャップで悩む ” だけは緩和するようにして欲しいかも……。」

俺の答えは決まっていた。

『承りました。では他のチートはどうしますか？ 願いゲージの100分の1も使っていませんけど？』

そんなゲージあったのか！！まあでも他は……。

「じゃあ……適当に生き残れるぐらいの能力をくれ！！別に魔王とかを倒すわけじゃないならそれぐらいでいい」

まあ無双したい訳じゃないからなあ。死なない程度の能力で。

『分かりました！こちらで最高の状態に仕上げます！！楽しみにしていて下さい』

素晴らしい笑顔で最高神は言い切った。

別にそこまでは求めてないよ！！！？

『では次に目覚めた時には向こうについていますので……。』

それでは……よき異世界生活を！！』

その言葉を最後に俺の体を黒い……いやドス黒い球体が包み込んだ。

「そこはテンプレで落とし穴だろ～～～～！！！！」

なんてことを叫んだと思うが次の瞬間には俺の意識はなかった。

-  
-  
-

『ようやく逝きましたか……。なかなか面白い人物でしたね。  
さて……。天ちゃんが来るまでに記録の改竄 改竄 っと』

-  
-  
-

こうして俺『高橋竜太』は異世界に旅立ったのである。

そして異世界へ……。（後書き）

お分かりいただけたでしょうか……

作者の文才の無さが……（泣）

それなのにごった煮小説を作ろうとする無謀が……

次からは異世界です。

宿屋はまだまだ始めそつにありませんが気長にお待ち下さい。

それでは次話もよろしくお願いいたします。

異世界はじめました。(前書き)

三話です。

短めです。

……

異世界はじめました。

目を覚ますとそこは……。

「知らない天井……」

「すらない!!」

雲ひとつ無い青空だった……。

雲ひとつ無い青空だった……!?

俺は慌てて体を起こし周りを見た。

-  
-  
-

草原。まさにそう呼ぶしかない美しい緑の絨毯が眼前に広がっている……。

「綺麗なところだなあ。でも、ここはどこだろう？」

最高神は目覚めれば異世界とか言ってたけど……」

そうだッ、あの最高神は確かにそう言っていたはずだッ。

ならここは異世界のどこかか？

『そうです』

ここは首都クランクランから西へ少し行ったところにあるマルタ  
イの草原だよ』

いきなり頭の中に最高神の声が響いた。

「うッ！キモチ悪ッ！頭にめっちゃ声が響く！

ダメだ……。二日酔いになったときみたいだ吐きそう……。  
泣く」

テンションが言葉では言い表せないほど下がった。

親が仮面夫婦の友達の家泊まった記憶を掘り起こされた。

人形みたいに張り付いた笑顔を長時間見せられた記憶が鮮明  
に頭に浮かんだ。

深夜、寝てると安心したのか滅茶苦茶ケンカしていた時の声  
がこだました。

次の日の朝は何事も無かったように張り付いた笑顔だった。

何となく人間不信になった。

鬱だ……。死のう……。



『ストゥ〜ップ！いきなり人間不信にならないで下さい！！  
一応これからのこととか色々説明しますから！！！！（泣）』

「それならばよしッ！」

復活した。

『 啞然 』

「どうした最高神？早く説明をしてくれ」

『 立ち直りが早すぎませんか？ 』

まあそれが取り柄だったしな。

『 まあそれより毎度毎度、最高神と呼んでは不便でしょう？  
これからは私のことはウシンと呼んでいただいてかまいませんよ  
？ 』

ウシン？それはベルギーあたりの芸術家の名前じゃ・・・？

『 なんとなく気に入りました 』

これからはサイコ・ウシンと名乗ることにします。

ありがとうございます。

では、突然ですが説明に入りたいと思います』

「気に入ってもらって何よりだ。じゃあ説明ヨロ」

俺はウシンの話をじっと待った。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・まだか？

「・・・おいウシンよ、まだか？」

ついつい聞いてしまった俺は悪くないと思う。

『ちよつと待つてくださいッ。今説明資料をFAX中ですから！！』

ああ〜番号押し間違えた！！また入れ直しだよ・・・（泣）

どうしてくれるんですか！やつと87桁まで間違えずに番号入れたのに！！！！』

逆ギレ！？しかもFAX！？どう届くの！？てか番号長ッ！！

三段を超えて四段ツッコミしてしまった・・・。

他にもツッコミたいところはあるがひとまず、

「あ〜なんかすまん。FAX届くまでおとなしくしてます」

謝っておじづ。

『分かればいいんですよ分かれば。』

．．．．えくまず異世界管理番号が．．．ブツブツ．．．．7  
875．．．．

管理組合コード．．．862019．．．ブツブツ．．．登録

名義番号．．．．2．．

IDNOが．．．．22．．．ブツブツ．．．上限歪曲面曲線係

S．．．．566577

所在地ad．．．49．．．ブツブツ．．．．．』

これは時間がかかりそうだ．．．。

この後、念仏のような数字の呟きを延々聞かされ続けるのであった。

早く届けFAXよ!!!!!!

異世界はじめました。(後書き)

お分かりいただけただろか。

前フリです。

次話もよろしく願います。

説明はじまりました。(前書き)

四話目です。

少し長いか・・・？

どうぞ・・・

説明はじまりました。

・・・。

・・・。

・・・。

『出来ました〜!!!』

うう・・・間違えること100とんで7回・・・  
やっと間違えずに番号を入れきりました!!!』

うをえッ!びっくりしたあ、いきなり大声出すなよ。

『まあまあ良いじゃないですか、それでは改めまして・・・』

説明しよう!!--!』

ウシン(最高神の名前bY命名俺)が

『某世紀末の暗殺出来ない暗殺拳の必殺技に対する解説』の様に叫んだ瞬間・・・

シュピッ!

ジーーーーッ。ジーーーーッ。

ジーーーーッ。ジーーーーッ。ジーーーーッ。

目の前の空間に亀裂が走り、大量の紙が出てきた!!!

大量の紙が出てきた!!!?

・・・ツスゲェ〜!神様F

AXスゲェ〜!!!神文明ハンパねえ!

「スゲエよウシン！！FAXってこういうことだったんだな！空間割れやがったゼツ！！！」

つつい大声ではしゃいでしまった俺は悪くないと思う。

俺が（ウシンのことだから）「エッヘン！！驚きましたか？苦労したんですよFAX送るの・・・」とか言うんだらうなあ」と、近所の小学生を見つめるお年寄りの様なほのぼのとした雰囲気で返事を期待していると。

『まずは人物からですね』

普通に説明はじめやがった・・・。

えッ！？何ッ！？俺の期待を返せよ！！

『名前はカー・・・』

完全に説明モードに入っているウシンには何を言ってもダメだった・・・。

これはイジメか？

- - -

### 人物設定

名前：　　カーラ・グライス（元・高橋竜太）

性別 : 女(元・漢女)

年齢 : 20歳(元・28歳)

身長 : 173cm(元・178cm)

体重 : 乙女の秘密(元・漢女のヒ・ミ・ツ)

3サイズ : 皆が羨ましかろうプロポーション(元・それなりの  
体形)

- - -

ちょっと待て……。この括弧は何だ!?俺は漢女じゃねー  
よ!

さすがに講義の声を上げようとしたが、さっきのガン無視を思い出  
した……。

無視ってひどいイジメだよね〜。気づいたらクラス中に感  
染したりするし……。

昔、学校の授業でイジメについて学んだときにイジメられ役をやっ  
たんだよねえ……。  
色々イジメ方はあったけど無視が一番ひどイと思ったからなあ……。

イジメ、ダメ、ゼツタイ!

そんな俺の心情をほっぽって説明は続く……。



能力	:	HP	500 / 189000	(MAX 999)
		MP	999 / 296870	(MAX 999)
		ATK	198053	(MAX 100)
		DEF	8969730291	(MAX 100)
		MAT	345298	(MAX 100)
		MDF	86753354960	(MAX 100)
		SPD	500	(MAX 100)

すでにHPが減ってる!!!?でもチートすぎる能力値!でもSPDだけ微妙!?

横の括弧は何だろう?MAX?

「括弧の中はこの世界の住人たちの最大値ですよ」  
「オールMAXの存在なんて有史以来いませんけど・・・」  
「つまり貴方は、最強です!」  
「どれほど最強かと言いますと・・・、」

過去最強を誇り、一年で世界の半分を手に入れた魔王の能力平均が78ぐらいです!

やったネツ!超最強!!!」

ババン!!!!とSEが付きそうな勢いでウシンが言い切った。

ああ、そういうことか・・・。  
 だろ!?最低限生きていけるだけの  
 能力をお願いしたはずなのに!?!というか防御特化すぎるだ

ろこの能力値!!!

ってチートすぎる

『もてる最高の技術をつぎ込みました！製作時間3分にしては上出来です！』

3分！？3分なのこの能力！！！？

『でも……、驚くのはまだまだですよ！まだスキルまで行ってないですから』

さらにチート上乘せ！？もうお腹いっぱいゲス……。

- - -

神様3分製作スキル BGM・某三分では作れるようなものではないのに無理やり創る番組opp :

ファンダムメンタルチルドレン

【四重結社】：神が何となく名づけてしまったスキル。

効果は絶対防御の進化版。

基本無敵です。

『二名メーカー』で作成しました。

【混沌の情報網（アルティメット・ウィキ ディア）】：調べた  
いことが基本乗っている。

が、信頼度は微妙。

パソコンサイト『ウィ ペディア』を頭の中で再現している。

しかも常に最新の記事に更新されていく。

【悪魔の微笑】ニコボボ：伝説の最強技。

最強系主人公が大抵持っている『ニコボ』の最終進化系。

どんな生物も微笑むだけで惚れさせてしまう。

そのあまりの『ポツ』率の高さゆえに悪魔の所業だと恐れられた。

副作用として感情表現が顔に表れにくくなる。

エネミー・オブ・トマト  
【女の敵】・女性の悩みに一切かからない。

それはもう一切かからない。『ダイエット?・・・なにそれ美味しいの?』状態。

ついでにトマトとは女性を表す言葉でもあります。

ディバイン・アクト  
【神の仕業】・神の思いつきによりスキルが増える。

所謂【ご都合主義】。たぶん賛否両論がある。

・  
・  
・

チートだ・・・。これはチートだ・・・。何気に3分で思い  
つかなかった分を後から

補充できる配慮までしてある。

・・・。

とりあえずここは・

「なんじゃあこりゃあ！」（某殉職デニム生地ズボン刑事風に）

『おお〜松 優作ですね！懐かしいなあ〜』

ウシンがしみじみとした表情（擬音を付けるならホニャ〜で決まり  
だ！異論は認めん！）でつぶやいた。

いや、顔は見えないですけどね。

コタツとみかん、日本茶があればどこぞの年末スペシャル番組を見  
る年寄りのような反応である。

『まあ人物についてはこのくらいです。次は世界について説明して

いきますね 』

人物だけでえらく疲れた……。

HP減ってんじゃね

えの？

ウシンの説明はまだまだ続く……。

ウシンからのFAX下部空白欄

nyoonyoon  
神の設定集

(カーラたちには見えていません。

そう言う仕様です)

主人公設定 :

若くして寿命で死んだ主人公。最高神のよく解らない失敗により異世界行きが決定した。

異世界に送り込まれる際に女へと性転換する。

元・男のネカマ君。少しオタクだがニートにあらず。ちゃんと就職もしている。

性転換後は『カーラ・グライス』と名乗る。

容姿は「ブーチ」の『一さん』の髪の毛を白くした感じ。

服装は「シューアリア」の『ーラ』

チート能力はハンパじゃない!!!

これから色々な人を魅了していく罪作りな女性。

主人公の裏設定 :

20歳に若返っているのは少し転生感を出すための神の計らい。<sup>はか</sup>

黒い球体に包まれてから肉体の再構成のために遺伝子レベルでの改造が施されている。<sup>はとこ</sup>

黒い球体のなかでは0歳から20歳までの20年の年月がたっている。

そのため、赤ん坊から20歳まで成長しているのだが、本人には一瞬の出来事のため覚えていない。

成長の間に様々な知識の植え込みも【ご都合主義】の名の下に施されている。

ニコポ的チートを持っているが基本笑わない方針で行きます。

最高神設定 :

サイコ・ウシンと主人公に命名される『最も高き神』

といっても、唯一神のため他に神はいない。

容姿は金髪、美女。(後のご想像にお任せします)

服装は神様にありがちなアレ。

世界の全てを管理しているスゴイ人。

ほんの少し出てきた『天ちゃん』とは秘書の天使のこと。

世間に出てくることはほとんど無い。

なので、世界各国で信仰されている数々の神は全て地上偵察部隊の天使たち。

最高神の裏設定 :

元は美青年でした。

暇をもてあましたので主人公を異世界に送り込もうとたくらむ黒い性格の持ち主のはずでした。

初期設定では最近楽しかったことに『太陽系を作るために行った隕

石ビリヤード』にする予定だった。

そしてなぜか関西弁を喋る予定でした。

金髪美女で容姿の説明が適当なのは美青年からの変更だったのだから考  
えていなかったから。

年齢は《

禁則事項です。

歳》

説明はじまりました。(後書き)

お分かりいただけただろうか。

小説と設定資料を混ぜてみました。

次話もよろしくお願いいたします。

1 / 1 0 主人公年齢を17 20へ、スキルに説明を追加。

説明が終わりました。(前書き)

五話目です。

熱が出てしまっても大丈夫です。

……



説明が終わりました。

青々とした美しい緑が広がる草原。

『マルタイの草原』

その昔5千という魔物の大群に対し、たった10人の戦士で立ち向かった英雄『マルタイ』の名が付けられた誰もが知る草原である。当時なんと呼ばれていたかは資料の喪失により解らない草原だが、この草原で魔物を殲滅したマルタイ達の功績を称え、隊長であったマルタイの名を冠する様になっただけ。補足ではあるが当時のマルタイの部隊は『マルタイ十勇士』と呼ばれる様になり、英雄譚には必ず登場する程のビッケネームである。

今では当時の激闘の後も無く、どこか長閑で牧歌的なイメージすらあるこの草原で、

一人の女が大量の紙の束をもって何も無い空間に相槌を打っていた……。

どこからどう見ても頭のおかしい女であるが、その顔はとても整っており、むしろぶり付きたくなるような素晴らしい肢体をくねらせる様はどんな聖人君子でもノックアウトであろう。主に性的な方面で……。

その素晴らしい身体の持ち主『カーラ・グライス』は一人静かに頷き続けている。

――

『それでは次の説明に移りますね』

語尾に マークでも付いているんじゃないかというぐらい明るいテンションで、『俺』の頭に響く声『サイコ・ウシン』が告げた。

てか実際 マーク付いてるだろ！？それと何だあのマルチイに対する説明！？いるのか！？

『はい、モノログに突っ込まないで下さい。』

次は世界についてですね。資料の12ページをご覧ください。』

いや、でもいらん』とご覧ください』・・・はい・・・。

――

『俺』は静かに頷き大量の紙の束から12と書かれた一枚を取り出した。

## 世界設定

克蘭大陸 :

トランプのダイヤのマークを少し崩したような形の大陸。

【唯一神『克蘭』が作り上げた】と伝承などには記載されている。大陸の中心にオー克蘭王国があり、西にはマルチイの草原が大きく広がる

自然豊かな土地である。

北には『エルクラン帝国』、東には亜人の国『ミルクラン王国』の二大国が居を構え、

南にはドラゴンが住むとされる『クランリード山脈』が雄大に腰を降ろし、見るものを圧倒する。

マルタイの草原を越えると魔人達の集落が点在する通称『魔人の園』がある。

ファンタジー世界にありがちな国家間の戦争などはほぼ無く、互いに協力しあい魔物の大侵攻に備えている。

いたって平和な世界である。

オークラン王国 :

大陸で初めて冒険者ギルドを設立し、冒険者の地位向上を目指した元貴族にして冒険者『カイル・オークラン』が収める大陸最大の国。国王は世襲制ではなく、国王に相応しいとされる人物を法具『クランの導き』が選定している。

国王が存命中でも相応しくないと法具に判断された場合は国王の交代もありえる。

国王自らが元冒険者であり、冒険者ギルド発祥の地として冒険者の数が多い。

大陸間の交易の中心地として大いに発展している。

通貨、言語などは大陸共通のものを使う。

宗教は唯一神『クラン』を奉ずる『クラン教』

二大国 :

『エルクラン帝国』と『ミルクラン王国』を指す。

基本的に仲の良いクラン大陸の国の中で特別に仲の良い国。

エルクラン帝国は魔法技術、科学技術共に高い水準をほこっており、魔導具なども作られている。

ミルクラン王国との交易により豊かな自然の恵みを数多く受け取っ

ている。

ミルクラン王国はエルクラン帝国の高い技術力を受け、自然の保護などに力を入れている。

しかしミルクラン王国は亜人しか住むことが許されていないため人とのハーフは全て他国に行かなければならない。（入国の規制がされているわけではないので商売などは出来る）

また、唯一ハイエルフ族だけはその高いプライドからか他国との共存に強い拒否感を顕わにしている。

魔人の園：

魔人達の集落の総称。

魔人には国や国王といった感覚が無く誰でもフランクに付き合うものが多い。

長老と呼ばれる者を筆頭に20〜100人規模で生活をしている。

長老の決められ方や集落のまとまり方などの決まりごとは詳細不明。高い知能と魔力を持つが、魔物と同一視されることもしばしばあるので基本は園から出ることは無い。

（伝承などでは魔王は魔人の中から生まれたとされている）

克蘭リード：

ドラゴンの生息地。

他の魔物もワンランク強いものばかり。

- - -

以外にありがちな設定だな。

『まあ冒険のできる世界を作ろうとした結果ですよ・・・私、人の争いのドロドロした感じ嫌いですし・・・』

「なるほどだから平和な世界なのか。」

それよりも続きは？」

『あッ！はい次は大陸共通の事項です』

- - -

クラン教 :

唯一神『クラン』を奉ずる宗教。クラン大陸において90%近くの人が入信している。

「全ては『クラン』神の元に！！」を教義に掲げている。地名にクランの名が多く見受けられるのもクランが世界を作ったとされているから。

唯一神『クラン』 :

最高神が送り込んだ地上偵察部隊の天使。偵察が目的なので加護を与えたりなどはしない。

- - -

クラン入りこんでるなあ。ほぼクランの独壇場じゃね？

『いや〜ビックリしましたよ私も。偵察に出した天使が

まさか『唯一神クラン』なんて呼ばれているなんて (笑)』

というかマジクランすげえな。入信率90%の宗教って何だよ！？

『本人は私を差し置いて『唯一神』と呼ばれていることに大変恐縮しているみたいで・・・』

『 今も私の目の前で入射角45度ジャンピング土下座をかま  
してますからねえ・・・』

そうか・・・。大変だな中間管理職天使『クラン』は・・・。

- - -

クラン語 :

大陸のどこでも使用できる共通言語。

国により少し訛りが違うがあまり気になるようなものでもない。

文字はぶつちやけアルファベットを90度回転させただけであり、  
ローマ字記入で言葉を作っていく。

文法は日本語と変わらない。

主人公には知識がインプット済み。

- - -

なんだ、このインプット『済み』ってのは!?!いつの間に入  
れたんだ!?

『あッそれは【ご都合主義】です。これからの生活が困らない様に  
私からの配慮です』

「あ、ども、ありがとうございます」

『いえいえ、それでは次に硬貨について説明します。これは実物を  
みてもらったほうが早いですね。』

『じゃあまず一番小さい硬貨から・・・』

ん？硬貨？実物？

「　　さて、実物は貰ってないぞ？」

『・・・あれ？送ってませんでしたk・・・  
送ってま  
せんでしたねえ・・・。』

今送ります。少々お待ち下さい』

また、長時間待ちか・・・。

『　　はい。送りました』

あれ？えらく早いな？リダイヤル？まあ良いか・・・。  
また、FAXみたいに空間割れるのかな？楽しみだ。

・・・。

ワクワク。

・・・イ。

ワクワク。

・・・イイイ。

ワクワク・・・？

キイイイイン！！！！。

チュドオオオオオオオ

オン！！！！！！！！！！

「のわー!!!」

ジェット機などが音速を超えて飛行する際に発するであろう高音とそれとともに飛来した何かが地面との衝突により生んだ爆裂音が俺の身体を叩いた。

「なんだ!!!?」

もうもうと立ち込める土煙の中、俺は飛来してきた物体に目を凝らした。

金貨? いや他にも銀貨や銅貨もあるぞ!?

多分ウシンの言っていた実物だろう硬貨が約50cmほどのクレータを作りそこにあつた。

いやいやいや!? あの音にしたらこのクレータは小さ過ぎるだろ!!! っって言つより・・・

「あぶねえだろうがウシン!!!! FAXみたいに優しく送れよ!!!」

うん、これは怒鳴つても仕方ないだろう。

『だってえ、FAXみたいにいゝ空間跳躍でえゝ送ろうとするとおゝ、座標のおゝ指定とかあゝすゝく面倒くさくてえゝ』

ウゼエ、果てしなくウザイ喋り方だ。この場にいたらあの金髪全て筆り取つてるところだ!



『ごめんなさい。自分でも少しウザかったです……。まあ今回は時間もなかったので全力投球させて頂きました』

「え！？あれ投げたの？膂力ドンだけだよ！」

『まあ暇つぶしに』こ 亀『全巻を2時間で読破するようならけた生活を送っていても最高神ですから。』

高々49825億光年程度の距離なら六畳部屋の端から端にボールを投げるよりも簡単なものですよ』

『では、説明を続けますね』

さて、光年って光が進む速さで一年かかる距離のことだろうか？数秒で着たぞこの硬貨！？てか『こ 亀』を2時間で読破って速読レベルじゃねーだろ！？

『この硬貨はくら……。』

やっぱり説明モードのウシンには何を言ってもダメでした……。泣)

やっぱりイジメだろコレ……。

――

クラン硬貨：

金貨、銀貨、銅貨の三種類からなる。

1金貨＝100銀貨であり。

1銀貨＝100銅貨である。

日本円に直すといくらという換算はきかない。

やはりというか硬貨の表面にはクラン神が描かれている。

なぜかは不明だが魔物を倒すと手に入れることが出来る。

- - -

『こんなところでしょうか・・・あら？』

シクシク、メソメソ。

『何泣いてるんですか？とりあえず説明は終わりましたよ？これから異世界生活ですよ？』

「お前が無視するからじゃろがい！！！」

大声だしてスツキリした。

うん、メソメソしてるなんて俺らしくないな。

『によわ！急に大声出さないで下さいよ！！！  
説明が終わったら私はもう引っ込みますから』  
それよりこの

えっ？お別れなのか？

いきなりのお別れ発言、少しでも一緒にいた時間があるので何となく寂しくなった。

『まあ元々私はあまり現世に干渉してはいけないのですよ・・・。

まあクランを通じて世界は見ていますのでコレからの人生楽しんでください』

「そうかなら仕方ないな、せいぜいこれからの人生楽しんでいけさ」

『はいそれではさようなら』

その言葉を最後にウシンの声は聞こえなくなった。

少しの寂しさを覚えながら俺は王都に向けて歩き始めた。

こうして長くて短いウシンとの付き合いも終わり、カーラとしての人生が始まったのである。

「 やっぱり女らしく私といったほうが良いのだろうか？

この紙の束はどうしよう・・・」

...

『ふゝ説明も終わりましたし後は時々覗いてみれば良いでしょう』

『 ……あれ？天ちゃん？どうしたんですか？そんな良い笑顔で・・・!?!?』

その日、神殿に響き渡る神の懇願の声は天使全員を震い上がらせたという。

## ウシンからのFAX下部空白欄

nyoon  
神の裏設定集

(カーラたちには見えていません。)

そう言う仕様です)

国王を元貴族にしたのは、【貴族は平民より優れた能力がある】という裏設定があります。

具体的には【力が強くなり易い】【魔力が高くなり易い】などです。これは貴族という称号がステータスUPの補助をしていると考えて下さい。

さらに一応ですがロープレの世界観がありますのでレベルUPなどもあります。

主軸はロープレですので。

硬貨の説明で日本円への換算は出来ないとしていますが、

ぶっちゃけ物の値段をいちいち調べて当てはめるのがめんどくさかったからです。(笑)

**説明が終わりました。（後書き）**

お分かりいただけただろうか。

ウシン最終回のお知らせです。

次話もよろしくお願いします。

無双しないと行ってたけどちょっとはさせますので、

戦闘描写なんてしたことないので不安ですが近いうちにさせます。

それでは。

王都を目指しました。(前書き)

六話目です。

じじい  
ぞろぞろ

王都を目指しました。

広大な草原を一人歩く女性がいた。

褐色の肌、腰まで流れる白い長髪、輝く美貌、素晴らしいプロポーション、その全てが神が配置したのではないかと思われるほど絶妙のバランスで173cmという世界に納められている。

そんな女がたった一人で歩くにはこの世界は平和になりきれてはいなかった。

自分をねらう6つの目があることにも気づかず、カーラ・グライスは歩き続けていた。

- - -

面度だなあ。結構遠そうだぞ？王都まで……。

俺は内心愚痴たっぷり一枚の紙を見ながら歩いていた。

王都から少し西に行った所にある『マルタイの草原』にいるはずなんだが未だに草原を抜けることが出来ない。

最高神と別れた後からまっすぐ東に歩いているのだがかれこれ2時間経つ。

すでに太陽は真上を少し過ぎたあたりだ。

しかし持っていた紙が消えるとは神文明はやはりすごいな。

そうである。歩き出して少ししてから紙は溶けるように消えてしまったのである。今手元にある一枚の紙を残して。

果たして残った一枚は地図？であった。

見えるのは自分の目視がきく範囲のみで後は白紙。

自分の行ったことがある範囲しか表示されないなんともゲームなどでよく見かける手法の地図である。

唯一方角が分かるのは救いだったが……。

まあこれもウシンの配慮ってヤツだろう。

それ

にしても、あの三人さつきからこそそ何やってるんだ？二十分ぐらい同じ方向に歩いているから目的地は王都だと思っけど……。

カーラは気づいていた。

まあ見晴らしの良い草原でこそこそ隠密行動が取れるはずもないが……。

――

「アニキどうしやすか？」

「あんな良い女めつたにいないんだナ」

「そうだな、別に生娘が求められてるわけでもないし、

俺達で楽しんでから貴族様に売りつけに行くか」

アニキと呼ばれた男はそういうと、汗や泥で汚れた顔を醜く歪ませた。

彼らは所謂賊である。

平和なこの世界にもバカ貴族は多数存在し、その権力をフル活用して女を力づくで奪っていくなんてことを平気でやってのけるのだ。

そのバカ貴族から依頼を請け、多額の賃金と引き換えに女を連れて



くるのが彼ら賊の仕事である。

彼らは元冒険者だった者達だ。

依頼に失敗し信頼を失ない、ギルドから除名処分を受けた所謂冒険者くずれ。

信頼を失った冒険者でもその身体能力は一般人を軽く超えるので、真つ当に生きようとすれば就職先など沢山存在するのだが・・・。彼らは、あまり苦勞せず多額の金をもらえる賊という仕事の魅力にはまってしまっていた。

女一人連れて行くだけで、平民が五年は余裕で遊んで暮らせる金が入るのだ・・・。まじめに働く気などなくなるだろう。

なので冒険者家業に失敗した者達が賊になるケースは意外と多い。賊の中でもランク分けがあり、彼らは中々の高ランクの賊である。

貴族によつては幼女趣味であったり、生娘しか受け付けられないなど変態趣味丸出しのやつらもいるが、

彼らはとりわけ美しければOKという貴族の依頼ばかりを引き受けていた。

目的はもちろん

自分達も楽しむためである。

自分達も楽しめるのだから依頼にも力が入るのは当たり前だった。

今回もお得意様の貴族から依頼を受け、広大で王都守護の騎士隊からも逃げやすく、魔物も少ないマルタイの草原で獲物を探していたのである。

そんな彼らが草原を一人歩く美少女、カーラに目をつけない筈がない。

彼らは逸る気持ちを抑え、カーラの前に飛び出した。

-  
-  
-

「こんなところでどうしたんだい？お嬢さん？」

男共がニヤニヤいやらしい笑みを浮かべながら話しかけてきた。

いや、お前ら結構前から見てたよな？あれか賊ってヤツか？  
ウシンの野郎！平和な世界って言ってたじゃねーか！！第  
一異世界人が賊ってどこが平和な世界だよ！！！！

「おいおいおい、アニキが問いかけてんだ何とか言ったらどうなんだい？」

「そうなんだナ。何とか言ったらどうなんだナ」

俺がウシンに対して愚痴をこぼしていると、いかにも　ネ夫といったガリ男とおにぎり大好きそうなデブが話した。

「今、王都に向かっているんですが道はこっちであってますかね？」  
とりあえず問いかけてみた。

「ああ、あってるぜ」

やっぱりニヤニヤした表情で男がつぶやいた。

「そうですか。ありがとうございます。それでは。」

特に用事もないし、あまり付き合いたい人種ではないので、  
男達の横をすり抜けようとした。

しかし……。

ガッ！！

「おいおい、まてよ。ただで通ろつてののか？」

「そうだぜ、通行料出せよ通行料！」

「だナ」

急に肩を？<sup>つか</sup>まれ強制的に男共の方を向かせられた。

やっぱり無理か……。でも金は持ってないしな。金貨一枚で足りるのかな？

幸い実物としてウシンに貰っていた金貨がある。

金貨の価値は未だ分かっていないので不安だが何とかなるか？と半ば祈るような気持ちで問いかけた。

「……あゝ金貨一枚しかないですけど足りませんか？」

「足りるわけねーだろ！アニキは最低でも金貨三枚は必要だとおっしゃっているぞ」

「だナ」

ダメだった……。

面度くさいなあゝ。ぶっ飛ばしてやろうか？

やダメだ……。今の俺はか弱い乙女なんだ。とりあえず何となく言ってきたような事は分かるが……。

「三枚！？そんなに持ってない！？」

驚いたような声で言ってみた。中々名演技だと思う。主演女優賞は

いただきだ

悲しいかな【悪魔の微笑み】のせいでクスリとも笑うことが出来ないが。

てか微妙な表情の変化しかさせられなくなっている気がする……。  
コレもスキルの副作用か？

「へっへっへっ、じゃあしかたねーな。カラダで払ってもらおうか」

コレまでで最大級にいやらしい笑顔で男は、  
テンプレで想像の域を超えない、ありきたりで何のひねりもない、  
小者臭がブンブン臭うセリフを吐き捨てた。

ここまで想像通りのセリフだと逆に哀れみを覚えるな……。  
まあ払う気もないし。

「……え？いやですよそんなこと。というか小者臭いですよ発言が。そこまで小者臭いと逆に哀れになりますね……。大物の発言を学んできたらどうですか？」

とりあえず言ってみました。

すると目の前の男達の顔が見る見る真っ赤になっていき……。

「てめえ優しく言っつてやりや図に乗りやがって!!!犯してヒィヒィ言わせてやるからな!!!」

そう叫ぶと男は腰に差していた剣を抜き放った。

ウシンよ、はじめてであった異世界人がいきなり敵になりました。全然平和じゃねーよこの世界!

異世界初の戦闘はどつちやら魔物ではなく対賊になりそうです。

王都を目指しました。(後書き)

お分かりいただけただろうか。

軽く挑発してみました。

次話初戦闘か？

それでも私はやっています。 (前書き)

十話です。

短いです。

どうぞ・・・

それでも私はやっていませんでした。

俺達は目の前の女に剣を突き付けながら勝利を確信していた。

俺達三人は元々冒険者であり、俺自身もレベル20をほこる兵じわせのであると自負している。

そんな俺達が精々20歳ぐらいであろう娘に負けるはずがない。しかも相手は丸腰なのだ。

俺達はこの後に訪れるであろう享楽の時を思い歓喜の笑みを浮かべていた。

そして、恐怖で凍り付いているであろう女の顔を覗き込み。

俺は言葉を失った……。

その女は眉一つ動かさず、まるで人形の様な芸術的な美しさの顔を少しかしげながら、

心の深淵まで見透かすかのような漆黒の瞳でこちらを覗き返していた。

ヤバイっ！こいつは何かが違う！

俺の元冒険者としての本能か、賊としての危機管理能力かは解らな



いがかが警報を鳴らし、  
子分二人に声をかけようとした瞬間……。

フッ!

ビュチュン!

目の前から女が消え、デブの居た辺りからなにやら気の抜けた音が聞こえてきた。

「おい、どうして……」

俺は恐る恐るデブの方に目を向け問いかけようとし、あまりの光景に絶句してしまった。

デブのちょうど胸の辺りだろうか？そのあたりに蹴りを入れたままの体勢で止まっている女と、蹴られたであろうデブが居た。

下半身だけの……。

「……は？……へ？」

ブシューウウウウウウ!!!

グシャッ!

フッ！

ビシャッ！！

メキヨ！

デブであった下半身から赤い何かが噴き上がり生暖かく俺を濡らしていく。

それと同時にデブの下半身は赤い水溜りに倒れ込んだ。

デブを吹き飛ばしたであろう女は赤い何か・・・『血』だ、血が噴出すと同時に又も視界から消えた。

「おい、ガリ気をつけ・・・」

ガリ（ス 夫）の方に注意を呼びかけ様と振り向いたところガリの方もこつちを向いていたが・・・。

首が一回転していた。

「ひい！！・・・おいおいおい！何なんだよ

お！！！！！！」

あまりの光景に俺は恐怖に囚われ恥も外聞もなく叫んだ。

「うるさいなあ。賊なんてやってんだから負けることも織り込み済みでしょ？今更喚くなんてダサイよ・・・」

どこか静かで、美しく聞きほれてしまいそうな、しかし今の俺には恐怖しか与えない声が背後から聞こえた。

「・・・じゃ、サヨナラ」

ドチユ！！！

女の別れの声と共に響く不快な音。

恐る恐る視線を下げるとそこには・・・。

ゆっくりと引き抜かれていく女の手が、胸の中心を貫いていた。

確かに貫いている女の腕はどこか現実味が無く、俺は混乱する。

その理由は明らかだった。

女の手には人間一人を貫いているにもかかわらず、返り血の一滴もついていなかったのだ。

は？貫かれてる？この俺が？レベル20まで駆け上がり英雄候補生にまで選ばれた俺が！？

驚愕は理解へ、理解は痛みへと繋がっていく。

一瞬の想像を絶する痛みは声を出すことすら儘ならない。

あまりの出来事に混乱していた頭が急に活性化し、過去の情景が流れゆく様を見ている。

しかし、それも一瞬。次第に目の前が暗くなっていく。

自分でも助からないことが分かった俺は、女に顔を向けた。そこにはやはり・・・

美しく、芸術品の様な女の無表情があった。

- - -

やっちまったなあ。・・・コレが最強系主人公が最初に経験する『殺し』の罪悪感ってヤツか。結構来るものがあるなあ・・・。だけど相手も覚悟を持ってやっている事だろうし仕方無いよな。

以外にも現代日本から来たはずのカーラだが『殺し』の罪悪感に苛さいなまれてはいなかった。

「けどやっぱりチートだなこの身体」

最初はほんの少しビクリさせるために急に動いたのだが、SPD 500はあまりにも早すぎた。

スピードを止めるために、デブの胸に軽く足を当てたのだが・・・

「まさかあんな事になるとは・・・」

後の二人も同じ様な感じだ。

ガリはスピードを止めようとし首を掴んだだけ、アニキと呼ばれた賊は軽く押しただけである。

「これ日常生活に支障出まくるんじゃないか？」

そんなことを呟きながらカーラは王都に向けて歩きだした。

この一時間後草原を抜け、無事王都にたどり着くカーラの姿があった。

それでも私はやっていませんでした。（後書き）

お分かりいただけたでしょうか。

初戦闘です。

一応ですが、主人公が罪悪感に悩まされないのは裏の設定があります。

では次話もよろしく願います。

到着しました。がしかし・・・。(前書き)

八話目です。

どろどろ・・・

到着しました。がしかし・・・。

オークラン王国 首都『克蘭克蘭』

克蘭大陸最大の国オークラン王国の首都であり、王城が存在する。街の中心に建つ王城はその白く美しい外壁から『白静宮』と名づけられている。その王宮には、建設当初より【レジストスペル】や【アンチスキル】といった防御魔法が多数かけられているためとても堅固で、その美しい外観を保つために【浄化】の魔法が永続的にかけられている。建設されて1000年以上経つが未だに当時の美しさを失ってはいないのである。現世に当時の魔法技術の高さを伺わせる建造物の一つである。

街は王城を中心に円状に貴族街その更に外側に市民街と広がっている。町全体をぐるりと囲むように城壁が立っており、城門は東西南北それぞれに一箇所ずつしか存在しない。

街は4つの区画に分けられており、北東が商業区、南西が養成区、南東が工業区、北西が居住区である。商業区とはその名の通り商業に特化している地区、工業区居住区も同様。

養成区とは様々な職業の人間を輩出するために生まれた場所であり、現在で言うところの職業訓練所みたいな場所が多く存在する。

そんな大都市であり、王国首都である『克蘭克蘭』  
その西の城門に一人の女の姿があった。

-  
-  
-



「ふい／＼やつと着いた」

目の前に威風堂々と立つ城門を前に女、  
カーラ・グライスは  
呟いた。

ここに来るまでに実に3時間も費やしている。  
ほんの少し前まで真上にあった太陽は少し西側にずれ、後数時間も  
すれば沈むだろう位置にまで来ている。

とりあえず王都に入るか……。え／＼と？

「止まれ！そこのお前ちょっと待て！」

キヨロキヨロと辺りを見渡しながら歩いていたからだろうか、不審  
に思われたらしく声をかけられた。  
急に声をかけられた俺は少し驚きながらも、声をかけた相手に目を  
向けた。

そこには銀の甲冑に身を包んだ騎士がいた。

「王都に入るには通行証の提示が必要だ。通行証はあるか？」

俺よりも高い背（顔はイケメン・・・チツ　　）の騎士が俺に問  
いかけてきた。

通行証？そんなもの無いぞ？　　ウシンよ【ご都合主義】  
はどうした？

あまり黙ってるわけにも行かず、

「田舎から出てきたばかりで通行証は持ってないのですが・・・」  
とりあえず田舎から出たきたばかりの旅人を装ってみた。

「なに？持っていないのか、なら仮証を発行するので詰め所まで来てもらおう」

そういうと騎士の男は詰め所と思われる城門横の建物に向かって歩き始めた。

ここで微妙に【ご都合主義】だなあ。

などと思いつつも、逆らっても何の特にもなりそうに無かったの  
で俺は騎士の男に従い詰め所に入っていた。

詰め所内は普通の家とあまり変わらない造りであった。四大家族が  
使う様なテーブルと四脚の椅子、寒くなったときのための暖炉、仮  
眠用のベットが付けられている。  
その椅子の一つに腰掛け俺は目の前の騎士と対面していた。

「いくつか質問するので答えてくれ。・・・ああ俺はディッ  
ク、西門の纏め役だ」

目の前の騎士・・・『ディック』は言った。

- - -

「いくつか質問するので答えてくれ。・・・ああ俺はディッ  
ク、西門の纏め役だ」

何気ない言葉をかけた俺はドキドキしながら目の前の女を見ていた。いつもの様に門を通るものを監視し、通行証の確認と通行証を持たないものに仮証を与えるだけのつまらない一日になるはずだった。・  
・しかし、今日は違う。  
いつもの様に呼び止めた通行者の一人、仮証を発行しようと詰め所に招いたものの一人に過ぎないはずだった女性であるが、対面して解ったことがある・・・

美しい・・・。

素直にそう認めるしか無いほどの美貌、可愛いや綺麗などの言葉を遥かに置き去りにした圧倒的な美。  
例えるなら、空に浮かぶ月の様なその美しさは俺の心を鷲掴みにした。

手にしたくても届くことはなく、しかし手にせずにはいられない、そんな矛盾すらも愛おしく思えるほどその女性は美しかった。

昔見た歌劇のトップ女優が田舎のトロくさい娘に見えるほど美しいな。

自身が驚くほど齒の浮くようなセリフが浮かんでくる。

その全てを目の前の女性にぶつけ、照れてはにかんだ笑顔を見たいと思ってしまった。

いかな。・・・まじめに仕事をせねば・・・  
しかし美しい。

どこかぼけつとした顔でもしていたのだろう、目の前の女性が少し

口を開き、

「・・・質問は？」

少し険を含んだ声で聞いてきた。

今、気づいたことがある。

この女性には一つとして同じ表情が無い。いや、顔自体はピクリとも動いてはいないが、見る角度、あたる光、さらにはその場の雰囲気さえもこの女性の美しさを引き出すための演出であり、その全てがそれぞれこの女性に最高の表情をもたらすのである。

そして何よりも、最も美しい顔を見たと思った次の瞬間には更に美しい顔を見せる女性。

その余りの美貌に、俺は戦慄すら覚えた。

「・・・質問は!？」

余りに反応が無かったからであろうか少し強く女性が問いかけてきた。

「・・・ッああ・・・すまんすまん。余りに美しかったのでな見惚れてしまったよ」

普段から『真面目な軟派騎士』と名高い俺がこの究極の美を持つ女性に何も言わない訳が無い。

「お世辞はいい。それより仮証を発行するための質問は？」

まったくお世辞を言ったつもりは無かったが目の前の女性はそうは受け取らなかつたようだ。

「・・・ああそうだなそれではまず名前だ。貴女の名前は？」

色々お近づきになりたいが、ひとまずはこの女性の名前から知ってほしい。

多分の下心を含みながら目の前の女性に質問を始めた。

――

「・・・ああそうだなそれではまず名前だ。貴女の名前は？」

やっとまともな質問が始まったか……。それにしてもこいつやはり要注意人物だな。

俺はディックを警戒していた。

まあまずは顔がイケメンだったので確実に遊び人というイメージをもった。

それだけであつたなら誠実な騎士として見れたかも知れない。が、しかし

ナチュラルにあんなセリフが出てくるなんて、

軟派野郎確定じゃないか!!!

俺はやっとまともな異世界人が軟派師に早変わりしたことに多少シヨックを受けつつも、ディックとの質疑応答に花を咲かせるのであつた。

現在駄弁り中、王都にはいつ入ることが出来るのか、『カーラ』の

冒険はまだ始まったばかりである。

到着しました。がしかし……。(後書き)

お分かりいただけたでしょうか。

ヤツはこれからも出てくるぞ。

それでは次話もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1661ba/>

---

チートだけど宿屋はじめました。

2012年1月14日01時10分発行